

論文審査の結果の要旨

氏名 岩佐 礼子

本論文は3部9章からなる。

第1部「内発的ESDの理論的構築」では本論文の研究背景、問題意識と目的が述べられている。この10数年来、環境教育を中心に、開発教育、人権教育、ジェンダー教育、国際理解教育など周辺の教育学的領域を含めた、持続可能な社会に向けての教育の枠組みについて、「持続可能な発展のための教育（ESD: Education for Sustainable Development）」が提唱され、国連においても2005年から「持続可能な発展のための教育の10年」が推進されている。しかし、この従来のESDは、安定した自然・社会環境を前提とし、個人を対象とした知識伝達や能力形成を主眼とする従来の教育アプローチに則った手法によるために大きな限界に直面している。（第1部第1章）本研究は、それを乗り越える概念として、不完全な人間が変動する社会や環境に向き合いつつ地域で内発してくる発展を支えるべく、地域社会に埋め込まれ、社会や環境との関係の中でダイナミックに生成してくる学びとして「持続可能な発展のための内発的教育」（内発的ESD）を提起し、その内実を明らかにすることを目的にしている。そのために、4つの地域において、地域に埋め込まれた学びが社会や環境の変動の中でどのように存在し、生成し、新たに再構築されていくのかを詳細な事例研究の中から分析し、その事例研究から浮かび上がるような形で「内発的ESD」を従来の枠組みを乗り越えるべき教育の概念として明らかにしようとしている。内発的ESDと通底しているような、フォーマルな学校教育やノンフォーマルな社会教育とは異なる、インフォーマルな領域においては、宮原の「形成」概念がありさまざまな議論が行われてきたが、人間にとって基本的な精神活動の発達と文化習得に大きく寄与することを示唆するヴィゴツキーの「文化的—歴史的発達理論」を援用することで、本研究では、現場に根ざし、自然的環境、社会的環境、文化的環境が一体化した中で、学習も教育も有機的に融合され、包括的な環境教育が成立するものとして発展的に捉え、人間の潜在能力という人間の力に着目し、集団の学習を捉える形で内発的ESDを位置づけている。（第1部第2章）また、研究の理論的枠組みとしては、鶴見和子の「内発的発達論」を中心に、「共同性」の分析視角をアマルティア・センや佐藤仁の「潜在能力」の理論で、「学びの質」の分析視角をマイケル・ポランニーの「暗黙知」や「創発」などの理論を援用しつつ、分析、考察をしている。を示した。（第1部第3章）

第2部「事例から立ち上げる内発的ESDの理論的構成」では、4つの地域の詳細な事例研究から、内発的ESDの理論的な構成を導き出している。第2部第1章「生活世界の現場における内発的ESDの発見」では、日常性における内発的ESDの在り様を、宮崎県綾

町上畑地区と山形県西川町大井沢地区の生活世界に根ざした学びの事例から抽出している。この学びは分析によって、知識や技能、価値観や精神性を軸とした「人と自然」と「人と人」のかかわりという二重の関係性を内包する明確な構造を持つことを示している。前者の関係性からは伝統や文化の継承と共同性の構造が、後者の関係性からは、自然物に対する深く親密な学びの暗黙的構造が剔出されている。第2部第2章「人間の不完全性と向き合う現場における地域の潜在能力の発見」では、個人は不完全ゆえに共同するという視点で、共同体としての機能を達成する潜在能力を千葉県市原市の二つの出羽三山講の講集団の事例で考察している。三世紀もの講活動の持続性を支えてきたのは、まず出羽三山という自然の教育力と、講の儀礼や活動に埋め込まれた共同性という、内発的ESDで育まれた能力が集合された集団としての潜在能力であり、メンバーが複数の講や地域組織を掛け持つ多重層共同体が形成され、それらをつなげる人と人との信頼に根ざしたネットワークの潜在能力も重要であることが示された。綾町内の伝統的な講の調査からも、伝統的な講を土台とした共同性が、現代的な自治公民館制度の導入の契機に、「伝統の再創造」が起き、それが自治公民館制度の持続性を支えていることを明らかにしている。第2部第3章「社会変動と向き合う現場の学び」では社会変動と折り合う地域の内在的な能力を探っている。山形県西川町大井沢小中学校の56年間続いた自然学習の試みが、子ども達が自然とのかかわりや、生業の手伝いなどで身に着けた内発的ESDに科学知を統合した、動的な内発的ESDであり、教員や住民、子ども達の主体性による柔軟で変化に富む地域の社会と自然に根ざした教育であったことを明らかにした。それは自然学習を通じた学校と地域の共同によって、過疎化という変動に向き合いつつ、自然学習を通して築き上げてきた内発的発展の歴史でもあった。綾町の現代型頼母子講でも、契機縁による救済目的の講が、有志縁による精神的紐帯形成の講へと次元を移行し、社会のニーズの変化と伝統の要素が成熟し、回信信用組合の機能の次元を超えた現代型頼母子講が創発していることが明らかになった。伝統の再創造と共に創発は内発的発展においても重要であることが示された。第2部第4章「環境変動と向き合う現場の学び」では、環境変動と折り合う人々の能力を、東日本大震災で被災した南三陸町伊里前地区の契約会という講集団による復興の取り組みから明らかにした。東日本大震災という環境変動の危機において、内発的ESDによって個人や集団が蓄積していた力を人々が発揮し、外部からの異質な要素（人々や組織などが持ち込む知や技）との出会いによって、新たな復興の展開が起きていたことが明らかになった。

第3部「総括と結論」において、内発的ESDのダイナミクスは「伝統の再創造」と「創発」の二つのタイプの展開を生み出す特徴を持つことが示された。南方曼荼羅の萃点と曼荼羅という概念を用い、「伝統の再創造」と「創発」の二種の内発的発展の展開を動的な内発的ESDが支えていることが明らかになった。既存の制度的枠組みを通して普及されながらも、逆説的に社会変革をめざすESDに対し、内発的ESDは潜在能力を発揮し、社会・環境変動へのレジリエンスを獲得していく自己や集団の変革の教育となることが明らかになった。内発的ESDという教育は個人個人のうちに統合され、身体化され、その知識も技も精神性も能力もかけがえのないもの（代替不可能なもの）となることが重要である。人間の内なる可能性を発現しながら持続を希求するメカニズム、すなわち内なるサステナビリティの構築こそが、この持続可能な発展を人間の成長の視角で捉

えることの真の意味であり、この内なる持続可能性の構築を内発的発展に埋め込まれた内発的 ESD が支えていると結論づけられた。

このように、本研究は「持続可能な発展のための教育」の発展的な新たな組み替えという環境教育を中心とした教育学とサステナビリティ学の大きな課題に対して、「現場」から詳細なフィールドワークを通じて、新たな理論的な枠組みを立ち上げていくという、方法論的にも斬新な手法で取り組み、「持続可能な発展のための内発的 ESD」という新たな枠組みと内実をもった概念を提起するという、オリジナリティが高く、また、現代的な課題における実践性においても大きく貢献する研究である。

したがって、博士（環境学）の学位を授与できると認められる。

以上 2 9 4 8 字

「論文審査の結果の要旨」の概要

1. 課程・論文博士の別 課程博士
2. 申請者氏名（ふりがな） 岩佐 礼子（いわさ れいこ）
3. 学位の種類 博士（環境学）
4. 学位記番号 博創域 第 〇〇〇〇 号
↑新領域教務係で記入
5. 学位授与年月日 平成 〇〇 年 〇 月 〇〇 日
↑新領域教務係で記入
6. 論文題目 「持続可能な発展のための内発的教育（内発的ESD）」の構築に向けて—社会変動・環境変動と向き合う現場における学びのダイナミクスの考察—
(An Approach to Formulating “Endogenous Education for Sustainable Development” — Deliberations on Emerging Learning Dynamics in the Context of Social & Environmental Changes—)
7. 審査委員会委員

(主査) 東京大学	教授	鬼頭	秀一
(副査) 東京大学	教授	味埜	俊
東京大学	教授	辻	誠一郎
東京大学	准教授	清水	亮
東京大学	准教授	福田	正宏
東京学芸大学	教授	原子	栄一郎
8. 提出ファイルの仕様等

	提出ファイル名	使用アプリケーション	OS
	(記載例)	(記載例)	(記載例)
(1) 使用文書ファイル	岩佐礼子_審査結果.doc	word2003	MacOs
(2) テキストファイル	岩佐礼子_審査結果.txt		
(3) PDFファイル	岩佐礼子_審査結果.pdf	Acrobat8	MacOs